



10月号 (No. 7)

2026年9月25日

帝京大学小学校だより

帝京大学小学校

2030年からの学びの方向性

帝京大学小学校 校長 石井卓之

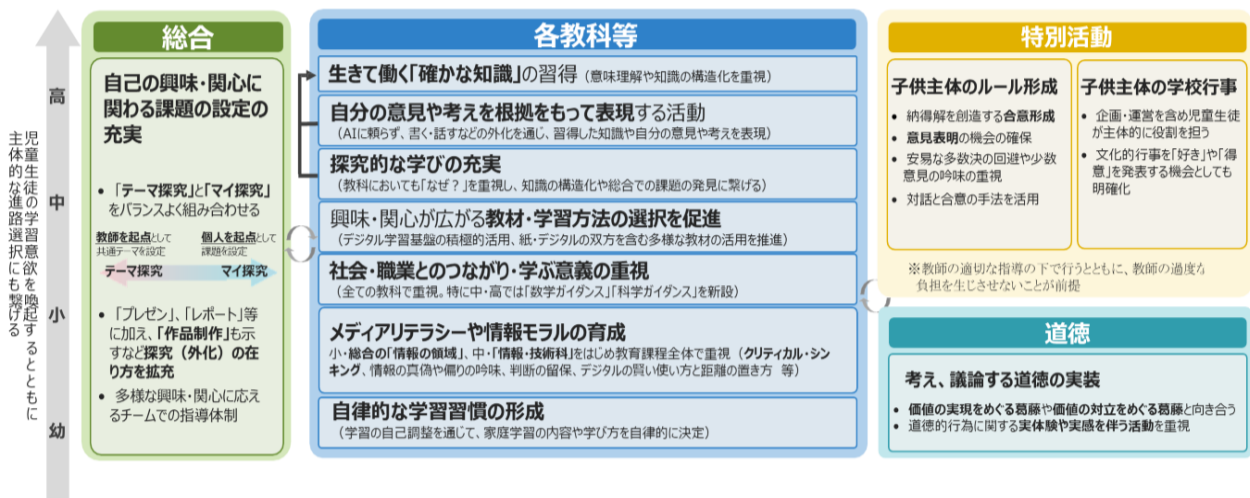
「主体的・対話的で深い学び」の実現を通じた

自らの人生を舵取りする力と 民主的で持続可能な社会の創り手 の育成

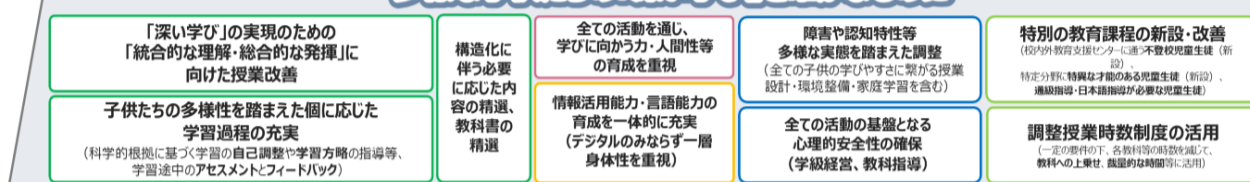
「好き」を育み、「得意」を伸ばす
(興味・関心)



当事者意識を持って、自分の意見を
形成し、対話と合意ができる



多様な子供たちの「深い学び」を確かなものに



2030年の学習指導要領の改訂に向け、色々な情報が出てきています。この夏休みに、文科の教育課程課長の武藤久慶氏の講演を聞いてきました。特に、「好きを育み、得意を伸ばす」ことは、本校で行っている「個性の伸長」、「当事者意識を持って、自分の意見を形成し、対話と合意ができる」、「自分の頭で考える、WIN-WIN、シナジー（相乗効果）」と同じベクトルだと強く感じました。また、探究科で行っている起業家教育や里山教育は、「テーマ探究」と「マイ探究」の両者の要素を包含しながら「心理的安全性」と「チームビルディング」の上に成り立っています。各教科等での学びを実学として発揮する中で、課題解決に向けて自己調整を図りながら粘り強く取り組んでいくことが求められます。

大学入試でも自己推薦型が増えてきています。エントリーシートにこれまで取り組んできたことを書いたり、面接でプレゼンしたりするなどする場面では、帝小の6年間の学びの成果が生かされるはず。他者との単なる比較ではなく自分軸をしっかりと持ち、「脱平均、キラッと光る個性の伸長」が、重要だと考えています。

2学期は雨が多く、運動会の練習を室内で実施することが増えています。そんな中、朝、昇降口で子どもたちの登校の様子を見ながら、ふと体育館の入り口に目をやると、6年生の女子がソーラン節の練習を江崎教諭と行っていました。腰を深く落とし、切れのある素晴らしい動きをしていました。さらに上を目指したいということで、見てもらっているようです。私があの動きで1曲踊ったら、翌朝は起き上がれなくなること間違いなしです。やらされ感ではなく、内発的動機付けから始まる活動、これが真の学びの姿だとうれしくなりました。縦割り活動の成果が発揮される応援団の応援も、帝小のよさです。今年はどんな表現をしてくれるのか、今からワクワクしています。